

新  
乃  
家  
機

七

木 2  
621  
2止

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5 6 7 8 9 20 1 2 3 4 5 6 7

JAPAN

TAMIA

門水加2  
號 621  
卷 2 止

卷之三

七  
卷

○虚字の事

謂はつまえせむ早めれ虚妄の事にて是に  
あれ、もとわざあがてひづれむのをちるあら  
有りありまへまへ満家の大あらまに心をゆく  
大方通すゆるべと凡てゆきとわうはれ一まへむよ  
ちくと向ひまじめやれ(えり)とれどもひ、行雲も  
碧雲火入古のとく既味(そくみ)とてりまよ

。二字書に專辭也と注あり方にもりて相重複

唯。こののと何乃とに。有。重。の。先。は。と。何。年。に。  
わ。ハ。經。一。此。者。何。の。月。を。め。も。る。と。し。る。け。此。  
字。重。と。重。一。此。よ。と。う。す。そ。も。も。が。ま。き  
と。し。ゆ。う。經。一。て。ち。も。き。無。わ。り  
人。と。の。不。嚴。の。用。金。れ。校。ひ。し。ら。ま。す。只。唯。愁。を  
じ。う。の。財。の。多。を。と。重。く。さ。る。の。事。、和。事。人。  
ま。ま。と。く。歌。こ。一。詩。よ。と。今。唯。有。鷗。翔。飛。と。つ。  
白。情。よ。仰。ひ。千。五百。義。宣。会。よ。  
財。と。し。ま。と。や。け。と。思。ギ。一。谷。の。多。ち。せ。ち。り。き。  
忠。良。の。刺。よ。神。の。又。さ。か。と。い。む。わ。ぬ。か。と。れ。云。

け。ち。の。財。の。多。を。餘。す。き。や。う。れ。 千。裁。集。に。  
け。り。う。派。と。人。も。あ。ま。う。ら。き。袖。の。く。ら。そ。と。だ  
ゆ。け。財。と。う。う。袖。縫。れ。終。す。重。す。と。な。う。み。  
と。き。と。漢。家。の。文。系。と。は。足。方。や。く。

○経

経。を。経。の。と。に。有。重。く。想。下。に。め。え。経。 唯。の。ま。れ  
仰。く。知。一。経。一。此。の。う。想。り。け。の。 経。あ  
う。ん。有。と。あ。ハ。ま。一。此。の。う。想。れ。も。う。じ。ゆ。材。あ  
の。え。り。う。想。れ。と。の。里。人。ひ。自。い。だ。と。う。想。れ  
き。、角。一。ま。と。う。想。れ。 家。書。と。う。想。れ。可。止。

之辭と注せらばすかといふ通り

○早

早も晴れの例こそ絶のどうえ重く絶乃下り  
晴れの日也。やあらわれ世の陰んとつるはま  
伊勢おゆの絶くよめやゆじとちひつてう  
早はあさりほく事ゆきと不昧直虎殿山絶

○先

先。字書に前進也と波せり先と集一  
世のやがてかづかひてかひてしまさわ風うりを

け、もの先の絶てもひく千載集に  
絶くに枯るうきはあれとせきじ、英ひどく  
右ニ至り先の絶字眼もあらうせのゆうもつ  
きもほのくことひくとくねうつては、お毎に  
絶のうきはるけきとくとくとくとくじとくとく  
万れぬよきひきわめかうじとくとくとくよ  
一きにつき先とく事ひま眼とくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

○して

してハ桑煙も言ふひとてつ絶うりいわきも

あはれとてとくあり日本記出哉イテヤ古今集に  
そつまく人ヒトを大和ヤマハラのまもにね思ふ事  
ごとく前マサニのものよりナリ墨モクにてこの  
事モノをうめりたるをいふわざやす  
とよもとお之ノミコト

○○  
○○  
○○

。さへま來と日本紀もあま浦りて刻

のうもくすれむちうえん一  
ひらうわく人ふるはせん  
けおのひがひをゆくこ  
いはくはまの山を一  
まつともじ

かくの事の如きは  
いわゆるのやまの山川をとおして和名りすれ  
ばつまちあつてハ不動をとく

蒙古文

としのうもあとのをりやあひのれいと  
あはメやのとれよ一万里に為當とゆ  
麥集よめりよもる在りふると信久成  
よ秀ひ 齋<sup>シテ</sup>神<sup>カミ</sup>くらむと称してとむちと見  
ねのまと猪の絆小を事、れも漢家の大業<sup>タマニ</sup>見  
及<sup>シテ</sup>かかわるお通<sup>スル</sup>いづらひの事<sup>ハ</sup>  
御<sup>スル</sup>事<sup>ハ</sup>とくにあくとくに國<sup>カミ</sup>とくに  
のする事<sup>ハ</sup>とくにあくとくに國<sup>カミ</sup>とくに  
はとくに事<sup>ハ</sup>とくにあくとくに國<sup>カミ</sup>とくに

○文

又、字書に更也再也と注す。又、字じの姓の  
みうちじうじを立つてよもかさんむへやと  
より、更よ再の意よねてり  
めえねのうへもじぬてりやうじ日めがたのへ  
け和みえまひえううく月の御よみうくと育  
ゆけ、村の木もえもあへれい論語<sup>レ</sup>管氏<sup>モ</sup>亦有培  
とす亦の木の用へ凡そもまくえもまくく  
氣<sup>ハ</sup>とくもうメの木とゆきそくもくくすく  
つひこ遠鳴清<sup>アラシ</sup>谷<sup>カニ</sup> 家隆<sup>カニ</sup>  
又、もしメやみくし室屋の玉<sup>タマ</sup>ノリ<sup>リ</sup>木<sup>キ</sup>木<sup>キ</sup>

後も承應御利又やさん又やさんしりあとおも  
候よかうすむれもしやうりそもあはせおと京極  
様門のれまみのスやもしらがのよめくめくめ  
ふとくめくめくめやさんそアメやさん、おもて  
のせとき、千五百歳うな」

春の日は辰のひにとおれうそも又朝もうそを  
忠臣蔵たゞとも又とるのあやまにまくと竹  
じきわきひのまへ更れどくとくとくとくとく  
一毛のほりのほりとお組くも優でく

○且

且ハ字書に發諾辭又未定之辭也ト注あらぢ  
ちまくとすゆ御てそりれもりうとあら  
アキムと外も内に立やうんばげハアクの  
あうそサとよきとれと樹奉る  
乳母うえび人よけくの御ふと行てよえ  
はおれ御未定之辭也參奉に御ゆゑ立たれ  
あうそとあうもおれ新おと集う  
御ゆゑうえうる山川の音よじまつてまれる  
れのと小補韻會に將字注且也とぞり今  
の言ふとくそばくとく字書ト

一經與文同與此同とさけ注と参考するに且  
きの又此の事お過ぎるわ

○やつ

○やくへ御くサとのむし拾遺集に

馬を馬じ、馬方代と豊臣氏の名をセ日下うき

新勤撰集に

秋ノ月ノ六一也と馬モトサクモの馬もま

延々ハ馬ノひよ通シ

後撰集に

ゆのそむづかのまきうわハあはま

けうハあれ二重に黒うりゆくのハありはま

○やて 濁清

ヤ。テハ消そすとあらすと消ふるが。つま高と聞  
何と音ひはれ。もとよとひつわぬとひれ。せせが  
はすと旅泊。もとよとひとよと。且消を。しらうとと  
み音くえつれ。がての。代官清と刻。一

松江は師。ちよ

山車。あらう。れい。も。洋。き。れ。て。ほ。う。と。う。経。は。美。

是消ふと。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

○やくのふ

やくのふりのくにと初め又よしは大底旨  
詔説めとてしるべ書盤四庚上玉若日格汝衆  
予告汝訓注若曰者非盡當時之言大意若此也云  
かりとよがりの暑にてゆくれ林宿とて向  
かふと何ぞひし世の中にゆきゆきありうるを  
としらゆくれと大庭とてあるまことにゆくと  
こととおこらせてひととすき

○は是

は是とすかねてうそと謂ひ古と集に

同集

いへりよりみらばすはれども今後は  
きくを知て此と當書よ彼之對也と注す

野と集に

いはともじとまとへづかへばタクレととくと  
とあらげの富からくまやけ称められまくとく  
のまくとくねくとくとくとくとくとくとくとく

六石義と合

いへりよしとくとくとくとくとくとくとくとくとく

利口ひふのとさくまやんをのひみとせはすと鹿賀傳  
仕事あわせられ羽はいきせらわくにめりとす布引の滝  
足まのわくんとくらのゆきくすくとくらはのまく  
りより 千葉百萬石、家令に

引くとしおとぬかのまゝ少く、さうするまゝのふをせ  
糸河利げおれあはとしつたれお乃公はくいえ  
是とゆきびと聞く所要のまへ仕事地に  
引ひやけりゆうりうれとあひ是。此の二行  
力引く事もあゆ多々あには是やけとまんざの初音  
の（今まかみ）（次後撰集）

是とひそ考へ一六と集旋頭方に引かれておれ  
さけはまのむうもととめく事の六方蟲が食  
を取つておれもまといひきのトゾハシヒツク  
利よそのトゾハシヒツクとねつておれと  
りあはれはせり

あれと並んで是も一毫の字眼とす  
まことの御心也と諦へ——古之集

卷之二

○彼

彼、字書に對此之稱又彼哉外之辭と注す  
考思より前略おのことソラウキシトモ  
後拾遺集に

却く人へあらそひの心をもせしやうふとす一枝も、却  
夕向風きよよきよきよきよきよきよきよきよきよきよき

きりありへは世のと思ふもりたりとどる。爰とまやうにわざと  
つうむかわへかうととくに付よあらとしゆうかひとにとお  
通きりはぬ。付ぬとこつらあらわす。あらわす。あらわす。  
ときとし字書よ彼對此く称と注せばにとくもと

○。おと 清濁

おとハ乾のと滻つきのとせと。おと濁く。判り  
ものと能はせぬとの異。古今集に  
おと付はせぬとやあらわすも。おと我。よきのひは  
とある紙於注。用。おとさりとし又おとくわづと  
おとじとも。契沖。若に異なるハの聲と。おと

ねおけ況も。物と。けてた。おと滻つきのあ  
は。如く。異か。けり。發神。あらわす。ひとひて。やく  
と。注。如是我聞と。有。如是と。あれと。如  
い。又於注。同。べ。うりと。注。契冲。統ふを  
に。異う。と。アモ。方。に。あ。と。け。と。アモ。ハ。セ  
有。殊の。アモ。そ。如。く。ア。方。も。ア。今。案。に。と  
き。ハ。く。ケ。と。ア。ハ。コ。ハ。ヤ。と。異。て。ア。モ。と。サ。と。五  
音。通。ア。モ。ア。モ。と。ア。ア。モ。この。ア。マ。ス。ア。モ。ト。リ。一。か。う  
み。ア。ハ。ア。モ。ハ。作。マ。ア。ハ。ア。モ。ハ。作。マ。

。と。

て。方葉に云。さりふと訓と。よとすひを  
トイヌ千也千トテハ五音のニ通と故よとす  
上古ハちふともえ。之はよとすひを。う事一も  
相の乃びて。しはよとすひを。と。とすひを

六と集に

丸とすむちと。とあらぬま。行ばま。に思ひぬま  
は初みえますて。あよとひうり。いふ。一まととす  
みえますと。わき。と。優。と。等。と。か。と。す  
種類。す。と。に。うり。又。絶。と。も。首。と。ま。の。城  
き。河。の。つ。ま。り。く。と。れ。ば。と。と。う。古。れ。集。に

割。も。ま。う。が。ゆ。じ。く。も。お。と。よ。と。は。う。ち。え  
け。う。お。ち。お。よ。お。と。よ。と。て。お。こ。勺。と。極。れ。花。と。す  
あれ。も。古。と。集。代。用。や。一。此。ち。も。第。四。勺。又。宗。れ。あ  
ま。り。と。古。と。優。と。一。つ。あ。る。ハ。一。ま。れ。を。よ。り。と  
の。い。も。う。と。優。と。一。つ。あ。る。ハ。一。ま。れ。を。よ。り。と  
古。傳。う。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。  
う。う。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。と。古。

○  
り。・。佐。よ。り。・。か。り。ん。き。と。大。き。や。あ  
と。ハ。お。り。・。も。ち。や。と。と。や。う。れ。を。二。集。に

何れもウラホノ様を身に付けておる事も

。ひよしのくわくをも見ひ

ももと山の木あらとすまき樹より江より立  
のやれとせはれ。ひづれよきわらわら  
利よしむかへゆきひめせす人ちぬれよきとまくひ  
とくぬるよしゆく

色とりとあわせのそれとおりの色を併せて  
是れもまたあると云ふ大底。うりへと云ふ  
が、はるかに都のうちの御内閣の御内閣  
は、はるかに都のうちの御内閣の御内閣

やうのものとて新後拾遺集に

則まことに也あればすらうまくもあれども  
とづけめのちとづけじよもくをもつておらずに  
もめりやうとある定家と秀逸とひそむ  
わゆるやかとらうとれう徳とらうといふ、まつり  
ちらもとりのまとくと(ま)新古今集に  
想さんと思ひがふ枯えう病めじう胡門れ  
れい病めらかめこ屋めりげふとる

○  
古今集  
かとも思ひうそかひ一もうかくはれく

ばくとあくのうくのうくとあくとあくとあく  
のうくとあくとあくとあくとあくとあくの  
うくとあく  
かあると、國のうへがきとおはやれとなわせぬね  
れ、おさくとおさくね、とひととひととひととひとと  
不殊真院殿、般若、又と某物、又と  
波のまづけ、おとこなうあるまのまくやあくまく  
曰集ねがくまく

風乃花ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき  
れ、おけまちゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

。ハ。ア。ニ。少。ヨ。ト。ア。ド。ト。通。キ。リ。移。勅。撰。集。に。  
ア。モ。ト。シ。ミ。ア。ル。第。ア。ホ。モ。ミ。テ。シ。ル。ム。  
新。古。今。集。に。  
ア。ク。ア。シ。ア。ホ。モ。シ。ル。秋。風。の。吹。き。ナ。ア。ト。シ。ム。ナ。  
ア。キ。ア。ハ。多。ア。ル。ア。シ。ト。モ。ア。ハ。ム。シ。浦。セ。ル。シ。

はくそり。初手の人をひきこぼはせぬめいふと  
ソラを間もねよ通せり。ちと集にひきこぼのつまむわ  
そは月くらとあはげ月はのじはせど程よ夫主同  
一物てうへ用。犯よほまれあはれわづのこしにまつ  
いゆうにまつても笑やあへと不勝焉後廢作

○高 放

高と放とくちとすく事のまことと心の  
口くわいからむとじつうに虫害まけはえをかよ  
けお、秋未尽爲二人長とよるのまことひく

夷くあまの罪せかくりぬつじつおとに賣あらひ  
は御製はまれ所のまに辛苦してりふとすまよ  
彼あらうとくわ夷くあらうとくり  
放ハみらのくわのすりすり詫なとくらハ詫な  
それまく利はわんもあととふとあくちよあく  
とくらとけ詫放とくらにくくとあと詫と詫引  
アヒヌ詫うきまじつものくらとくらとく人ト  
きありのりとあると考合シ一通鑑獻帝紀曹操  
下令曰故在濟南正譖曰今按故承上起下之辭猶言  
所以也。續千載集」

君の國と、いよいよはまらぬ少しもまづまじひん  
けゆきの為。身に氣故の字と申へ

○  
卷之二

いとひ痛あらまゆめ寂の心に  
新勅撰集に

御書推集

鈔報推集

卷之三

新刻後漢書

ゆきの浦ノ沖はもぬく  
やうにやうにぬくもん  
くわくわくはくはく  
くわくわくはくはく

彌八字書小甚也益也或作弥彌彌稍及也

卷之三

かわくはるあらわのうじゆをせんが

०

や、漸々字書に稍也進也とほせり第  
あくまう新古今集ノ  
胡々けのう、またぬれや、り、  
番本をにりもつてやうへきらひつるやと  
ゆゑしてはうらむるいとソフはやハやのとも  
ひるあくまう

○  
○  
○  
○

や。よハヤニ候ひとと初し右と某に  
到ゆまをふかくれどもいとん我せや小ほひのう  
けうやわと呼ひてソラニ又鳴峰と歎息のうちも  
かゆつてもゐ一新古と某に  
や。きぬ野里の神のまづりせやあはれほ行旅  
野松邊某に  
や。ひるゑの宿をほのそやとくけんさあはいふせん  
け二重ハ敷息乃へまうむらまく

○ひ小  
濁清

○  
い  
小  
濁清

のとて是の事は私に實じて是の處を  
書く 実の事はげと刻もとハ實ハ字書く 驗也と注  
とけ驗の字音と和めて字と讀む一俗」や今

又に通すり管後撰集

又け。小豆の御内集に

タクル、景子はひよりあをまわして、うらやましく人をうながす  
は、うれしき道よりは、いのちも務め也。又、五事は異と見て、けよと  
おぼえたり。このとくも、ゆきうるむやうに見えん私文墨は  
字書一奇怪也。どうぞあれだけは、奇怪の筆か。

あらのひまくとて一の事とらふといひ其死と云ふ  
と刻もあらぬ實験の音は備異ハ奇怪也と又  
奇怪の音と重ひと云ふ事もあらむ若者や  
鬼、陰陽て陰の事やじ淫乃吉と和歌と云ふ  
注せりけ例より古今集に

かくのうすきのまへにあらまゆる  
けあひのむかへ御えと約こと放すとて  
却ひよつてはれとてかく  
めいのハ黒のまゝ口と墨  
きりくわせば字清と刻

○もへ

む。宣之手書に道理也當也と注せりての為難す  
あくじふるをばらへんとまつてかくへ

後撰集へ

一とせにすとしらむせよじがへんへどひり  
新勅撰集に

○また

またハ通の方より人主とある者あまう初學  
の入門と實業小町の教科書へうつにありれ

○また

ううにの織をうめせ一車へとれる上句優りと  
うへてほまとの相談がちいととあ六百枚を合に  
おじきととれどもまよひの處がうちまよひ  
利よまとの内不と度量を云同ふ合よ

はせはなとととおりとおもてとての義理を盡  
利ふまじの弱まぬふ不足と筆アラリ日、すに  
ちりほるれとやまるとおもふからとおれ志義れ山誠  
たすとおもひよまによせらる、利よまとのれり  
まともおもへて頗ア然れま

○まいまよ

。まことにハ隨のむく後拾遺集に

とくに引ひて、わが拍ひうちとくとくを理分  
引ひて、おとこと歌事へかへり。其後格遠集に  
引ひて、通じあはれを不思議ふ。たゞなれの事よりて、  
は、おとことあはれとしむる用一作納采  
行ひあつて、行角行えりまき  
おとことあはれとあはれ

卷之三

○ たす  
ちます

さす。の如くひがへた事。」ゆるめに人へてよみ  
えり。たゞかのへは済まにかく。おとせに決一の見  
和諧す。よき筆にあつて。おのれ多一からぬ。假不善

のまゝに知りて、せゆゆ

以て山野の郭を一時居候りた  
けり即ち其の事もえりてのを

さてやつてとお伺ひ  
ひとと銀嶺屋敷の

御統り續後撰集

○わくら

元祐中也。之不敢也。敢八字書上決之辭。說文。進

まことに、まへ全くあらわしも、今あるの異る  
儒家の経は、宋、官は不同なる事にして、來後未見。ト云日本  
乃、ヨリとて、御はまつて、近き、アリヤシ、不の御代え  
テ、御ゆきとて、御擧立とて、御あれば、まこと、宜  
御えに、おわづかる、まくびくを、もともと、まく、やうり、い  
と、ち、末の字あつて、文章よつて、れのまうとて、れを  
ば欣然とて、すよ、和諧、併、草書めりて、済まし、あ  
らきる事、つゆと、がくと、と、唯、お詫すす、も、に、御、手も  
解つようぢりと、東にまつしまつしまつ、不、未、同、一、事、に、ま  
い、まつと、御、うそ、御、うそ、と、サ、やう、うよ、まつ

万葉集は、いとくわざの文章、萬叶の文作、  
御の筆に、有りまことうつゆの記、  
ひめゆる、からむる機、うちむとく、  
ちと其に

ひきよのすが、まことの  
御みくわの主をもて者ハ少く有

いはすがまにまかせても、あ  
は二そく潤のふ、ま、とおも  
きあはるいと約とよし上  
りあひてうら主二集に  
あひてうら主二集に

是中之物乃松と云き、木の  
上より下り古今集】

所一、清秀の酒の味は、古事記の  
雅經の如く和力文也と文常流。向井之  
名號は元・神人・山中と初と切と少・空と即  
といふ事二句につきて所の如く、其の事

卷之三

古文真賞

之を以て其の事にあたる所を悉く之を  
速乃ちそぞと集め  
取次へば、其の事にあたる所を悉く之を  
清捕の手に付へ、その中より其の主と

七  
卷五  
萬物皆有之——但未以此爲此也。吾多  
以凡及者視之。亦爲爾八疎乃知其深。(主教)

や  
う  
て

也。遲也。其率此而以之繩的。有失有得。  
千載集一

のあくまく本心からやても義の法則あるが  
まことに義乃はまことに心も事乃心之  
心がゆゑに生じて其事とならざる事やうも  
とむらむる事とよどきの心に付清集  
小鳥の音は乃ちめぐらとやまとわれぬ心も見え

是れ往々  
物をもくらまんの心す

○  
ئىزىز  
ئىزىز  
ئىزىز

いふいとくに  
紀の心事ハ重んじ  
まやかすに  
心事ハ重んじ  
まやかすに

計初學文字重刊初刻古今集

新編後漢書  
卷之三  
同集二抄

御文庫

之に随て其の事小止むと申すの事守

是事のいふがおれのいふとしるよ考合をす  
もう一歩さううり

いそばあくめん、行つてとひゆ  
はくとほのきん人まきをやかむまくとくの事  
はそ行くとまきとみゆ  
復わはいそか（まもじま）は園こゑぬと  
毛行をしてのぞれ、と復わる

○いつ

いづかねとえきり辭いづ。が。もくとすく  
行見時としむと往かう不友

いづかねとあらハニ振わり  
いづかねとあらゆきもきにきわづのひま  
けいきはなうじうみ細くして初見へもひ  
やく新和撰集よ

いづかねとあらゆきもきにきわづのひま  
せうと聲冲、うづき歌くとせし（れまきけ）と  
ふもとせうとせし（れまきけ）とせし（れまきけ）と  
おもとせうとせし（れまきけ）とせし（れまきけ）と  
とくの声製（くせい）し、のいづかねとあ  
ゆきとあらゆき（れまきけ）とせし（れまきけ）と

。く。そ、う、い、ほ、こ

。い、も、う、う、ハ、月、私、の、私、う、一、モ、れ、私、か、り、て、い、さ、う、  
。や、あ、す、ぬ、で、う、き、ひ、と、ま、き、の、里、と、う、が、ば、く、れ、る、

。古、今、集、に、

。た、も、も、人、走、行、に、う、り、よ、く、つ、れ、と、う、と、ひ、れ、く、  
。じ、つ、も、ハ、む、と、ト、う、き、ゆ、と、う、て、新、勅、撰、集、ト、  
。五、九、元、ち、よ、だ、ら、れ、と、と、う、き、ゆ、と、う、と、す、ん  
。そ、ハ、前、の、と、と、を、じ、ま、も、う、お、年、**新、集、**、譜、  
。し、り、と、と、ま、か、さ、く、に、め、ね、す、う、と、と、わ、な、く、て、あ、と、  
。い、セ、す、の、く、ら、に、

。い、が、く、な、を、ひ、う、と、ち、う、を、ひ、う、サ、ト、も、う、り、に、ひ、く、  
。サ、ト、く、が、う、と、と、せ、約、つ、き、と、す、あ、り、未、決、の、辭、之、俗  
。よ、ど、う、と、と、す、れ、

。い、づ、く、う、づ、く、と、こ、ハ、五、音、通、と、れ、ハ、多、れ、と、く、と、く、  
。後、よ、ほ、ほ、唐、く、し、り、唐、く、し、り、唐、く、し、り、  
。考、古、に、同、一、事、と、笑、の、但、不、味、古、唐、處、し、り、  
。終、ハ、古、風、と、と、せ、を、あ、り、か、ほ、と、と、を、あ、り、と、と、  
。事、事、中、唐、處、は、う、と、と、と、と、あ、う、唐、處、と、と、  
。と、と、と、と、と、と、

。せめく

せめく、俗々やあとののゆくよもくメヤタクミタコ  
セモリセモリとてのゆもくへ

セモリセモリとてのゆもくへ後拾遺集に  
はうハセモリとてのゆもくへ後拾遺集に

ハシモト今ハルトとせめくとせめくとせめく

重音集へ

セモリセモリとてのゆもくへセモリセモリとての  
君ニモセモリとてのゆもくへ

わく

わくれ、歎息乃約シシテモリヒミカガムラ  
ノミシテモリヒミカガムラのゆもじねセモリヒミカガムラ  
ヒアカレハ俗ニカツレヒミカガムラヒミカガムラ  
ヒミカガムラ歎息一トシキタヒミカガムラ

ハカレ、歎息乃約シシテモリヒミカガムラ  
ノミシテモリヒミカガムラのゆもじねセモリヒミカガムラ  
ヒアカレハ俗ニカツレヒミカガムラヒミカガムラ  
ヒミカガムラ歎息一トシキタヒミカガムラ  
シカレ、歎息乃約シシテモリヒミカガムラ

○ふそり

情ハ志の外にとゞ字書小性之動是情也ト泊ち  
リ身に居やいふと思ひつゝあひソレシテうがひし  
又えぬるつるに

柳葉と柳の葉をしらへと守る葉は一叶一葉の言  
はすハ林間燐酒燒紅葉とゞる時の心状うらうらひ酒は  
アラクモキセキシテ圓小うちてるが事ト初夢の  
人も酒はまくまくしまづえやうめく萬葉一也  
不勝喜慶乃傳き一六ろまみを名よ  
百葉の花ひかくおひじつ情詩と題の跡もや

日暮記とゞはれき聖もやとよもと月夜合  
とづくは情をもゆあてくじ納々和焉乃タ自れ此  
是ハ年に志田通一角こそく情はやまを

○さけき

うけきバニ傷めゆくゆるたのまくせねゆ  
花はちあがむるがんじゆもひもひゆゆとおは  
此等もゆまくすくもゆくえ春の女御乃は雲代日暮  
ノ紀をこめりすく羽とハ一編ノをゆくく  
思ひつねく紫やタタキもぎく峰里それかに  
とくあく西製ハニ傷めぐらとよゑづりめり

是と以考合すノ一切行カ一め必定ニセラ

○  
い  
は

り。やうやくのをとすとされもすまらじにゆる  
外とてはもれしゆもひきとめのうとせひゆる  
者立あらへりまこととせり  
波八束の對詰と或八束りし人の事ゆり達  
きるまゆりの事と  
禁又禁よかりはくもとゆきにうゑくとも口不  
ちくはわづりのとゆくとよとおとせんか  
禁本意有爲あ序としゆくとよあらめ

○清之集

○ 打叶经

お、時節の時より多く大体四、五勢あります  
其の内、多くは、心地悪く、行かざる所へ爲りん

拾芥集  
糸井りかの筆をうかがひて書く。山家は、山家と  
古事記のわざとめでて、とてまほ向かひ。又古事記  
内傳もひきとめらへば、附屬のもの也。  
往ハ身の外と身の内とあくしゆる極乃至る事  
をとつて、外のほとりに品とすを極めりたと  
いふ事ハサ一中れど、いさゝく間とよへ後成る事  
けり。少く佛のさざめくからむの御利益立を爲る  
ととぞんづけの間へ

全集

拾遺丘墓

千五百卷之合。雅經

春の事は猶も想ひ思ひ承のれど、此の後は  
御門刑よほの事かとぞうかす。やむんとく  
すくは、財部と大内にうておれ財部と  
うわづかをす。

序引立抑

お。ま。か。引。き。れ。ま。く。う。ま。す。あ。り。か。  
引。立。押。の。字。一。向。ひ。き。れ。ま。く。お。事。の。縁。引。立。  
の。縁。立。九。縁。押。立。の。縁。立。め。う。ち。め。う。家。室。の。縁。  
す。し。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。ひ。と。



平安錦山堂款書和畫目錄

儒書醫書佛書石刻  
目錄別

八代集抄小村李翰  
五冊

數字假名毛三冊

源氏物語抄二冊

古今和音集大字二冊

墨葉假名毛三冊

名女抄活五冊

同古修本竹紙抄  
三冊

能國歌枕三冊

女訓抄六冊

古今集數額七冊

世経抄活三冊

經草六冊

伊勢物語七冊

室治大藏文抄活三冊

叢林和音集小冊

新古今和音集小字四冊

宗祇祕傳抄三冊

俳諧武玉川十冊

新古今和音集細川幽斎  
二冊

伊勢物語文藝抄五冊

日記抄五冊

古今抄二冊

秋仙金玉抄小冊

門抄五冊

大義句帳	拾冊	琴曲抄	三冊	書札文言指掌	三冊
美音百人一首	壹冊	接葉雜著集	三冊	辛中風文章	中村三五子 五冊
冠玉百人一首	壹冊	琴之組	壹冊	案用文林	壹冊
小倉百首鳳凰臺	長谷川妙真草 内後玉枝 壹冊	案九松門	壹冊	庭訓從朱經抄	三冊
女策工歌	壹冊	同 新板	壹冊	七宝庭訓	壹冊
門 玄翁病	門 美 三冊	文通書用字後卷	同 壹冊	童字真抄	三冊
女消息丘文庫	四友玉枝 壹冊	宣民從來	門 五冊	童字從來	性急抄 三冊
壬午庸羨詞袋	門 壹冊	拾玉用文章	壹冊	百家商賈從來	五友抄入 壹冊
女詠詠教訓歌	門 壹冊	書林定法記	中村三五子 三冊	式目綱名附	壹冊
童蒙書	子平抄 壹冊	大和從來	大和 壹冊		
同書	子平抄 壹冊	美空音用集	壹冊		
新撰胡歌	子平 壹冊	恵字三角用集	壹冊		
男郎用如篆家珠	壹冊	書稿言用集	壹冊		
慈旨世活字彙	用文章入言用 壹冊	世活字畫	壹冊		
後裔郎用集	中村三五子 壹冊	字教大全	壹冊		
書林音圓要字彙	中村三五子 壹冊	改纂記大成	壹冊		
大之部用字彙	壹冊	但馬湯山隨中記	道中名 壹冊		
廣大郎用集	壹冊	家業道德論	三冊		
		保元平治抄	六冊		
		雞頭柳乃錦	三冊		
		御氣墨彙	大字 拾四冊		
		後序音宿稿	稿字函 七冊		

後草元紅葉

西門祐信著

二冊

十枚

奇文集

四冊

鈴日山

12

三冊

同校正新板

三冊

同流深

三冊

子嚴山

12

三冊

香道祕傳

三冊

同宿梅

三冊

同桂華譜

楊柳風

五冊

同奥の道

四冊

同秋水之系

三冊

同名勝画譜

并傳石子

四冊

同游之系

三冊

同立元正道集

三冊

同玉ね盆

赤東玉兵

六冊

同野のゑみ

三冊

同極入家竹波

三冊

同墨道院抄

五冊

京都書林玉枝軒

堺川至三上九丁  
櫻村藤右衛門

三冊

同 妻録

一冊

同 出店

三冊

同 具影錄

一冊

同 游出店

三冊

同 植村

一冊

同 植村藤次郎

三冊

安永十九年己歳之月

京初

植村藤平

植村藤右衛門

書林

植村藤平

植村藤右衛門

江戸

植村藤平

植村藤右衛門

卷之九

萬葉集

萬葉

萬葉集

卷之九

萬葉

